

オンデマンド科目「音楽史」の授業デザイン

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 昌弘, Sato, Masahiro メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2684

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



オンデマンド科目「音楽史」の授業デザイン

Class design for the on-demand subject “Music History”

佐藤昌弘

Sato Masahiro

はじめに

2020年以降のコロナ禍における大学教育において、「学びを止めない」ために全世界的に活用を余儀なくされたのは「オンライン授業（遠隔授業）」と呼ばれるICTを活用したメディア授業であるⁱ。筆者が2016年度より主担当を務めている本学音楽学部の通年授業「音楽史」もその例外ではない。毎年度500名に及ぶ多数の学生が履修する「音楽史」は、2015年度後期から2019年度まで本学前田ホール（座席数1114席）という大会場で開講していた。本学の「音楽史」の授業は、主担当教員の筆者（作曲、音楽教育）と副担当教員の越懸澤麻衣講師（音楽学）、もしくはゲストの講師と演奏家が舞台上で講義、生演奏を行う一種のレクチャー&コンサート形式に大きな特色があったのだが、コロナ禍を機に2020年度よりオンデマンド科目に移行したことから、その授業形態を大幅に変更することとなった。

インターネットを通じて講師と学生のコミュニケーションをリアルタイムで繋ぐ「同時双方向型オンライン授業」とは異なり、配信によって開講される「オンデマンド型（またはオンデマンド配信型）オンライン授業」は、教える側も教わる側も直に顔が見えないというハンディキャップがある。したがってオンデマンド型では、学生が授業をどの程度の熱意をもって臨んでいるのか、並びに彼らが授業をどの程度理解しているのかについて、教員側からはそれらを直接測り難いし、学生側からしてみればリアルタイムで教員に質問をすることができないという不自由さがある。しかしその一方で、オンデマンド授業は履修生のスケジュールに合わせ、彼らのペースで受講ができ、配信された授業コンテンツを繰り返し見られるというメリットがある。これらの特性を考慮しつつ、本学のオンデマンド科目「音楽史」は2020年度、2021年度の二か年をかけ、さまざま鋭意工夫を重ねて授業をブラッシュアップしてきた。その成果が認められ、本学FD委員会の依頼により、2022年3月29日に学内にて開催された本学教職員対象の「オンデマンド授業FD研修会」にて、「授業の工夫を広く共有し全学的な授業改善を図る」ということを目的に、筆者はオンデマンド科目「音楽史」の授業デザインについて約40分の講演を行った。本稿はその講演を敷衍したものであり、500名もの多数の履修者を対象に、いかにして質量ともに十分な授業コンテンツを制作し、その配信後に受講者の学習のフォローアップをいかにきめ細かく行っていくか、といったことを主眼においてオンデマンド科目「音楽史」の授業デザインを行ってきたか、並びに2022年度の現在も授業運営を行っているのかⁱⁱ、ということについての研究報告である。

1 オンデマンド授業の特色

オンデマンド型の授業とは一般にどのようなものかということについて、オンラインの学習プログラミングを開発、提供しているキャストリア (CASTARIA) 株式会社の「デジタルラーニング教室」というインターネットのサイトから引用したい。

オンデマンド型授業とは、予めインターネット上にて配信された資料や講義動画、課題などを好きな時間に好きな場所からアクセスし学習を進める、オンライン教育の形式になります。Zoom や Teams といった web 会議システムを使用するリアルタイム型での授業に比べ、オンデマンド型授業の場合は生徒が自立して学習を継続するための仕組みづくりなどを必要とするものの、通信環境によるトラブルが少ないことや講義内容のストックが可能なことなどが利点として挙げられており、長期的に学習を展開していくという面において非常に効果的な学習手段です。(「オンラインでの教育・学習・研修・訓練をもっと良くするための情報サイト デジタルラーニング研究室」)〔下線は筆者〕

「好きな時間に好きな場所からアクセスし学習を進める」ことのできるオンデマンド授業は、「教室」と「時間割」から学びの時空を解放するところに大きな特色がある。それではこのことは、授業を受ける側、授業を提供し運営する側にとって、それぞれどのような影響をもたらすのであろうか。

1-1 オンデマンド授業の利点

特定の教室、時限に縛られないというオンデマンド授業の特色は、オンデマンド授業ならではの利点として「音楽史」の受講生からも支持されていたことが本学の 2021 年度授業改善アンケートにおいて伺えた。そこでの受講生の意見は「オンデマンドだから止めながら自分のペースで勉強が進められる」「オンデマンド型で自分の生活に合わせて受講できた」「オンデマンドで何度も見直すことができる」などといったものであった。一方、授業を提供、運営する側では、「音楽史」がオンデマンド化したことによって次のような利点が認められた。かつて大ホールで開講していた頃の「音楽史」では、毎回平均して 400 人を超える大勢の出席者が、好ましくない受講態度をしていないかどうか、常に注意深く見張っていなければならなかったから、それは当時の授業運営チーム（主担当と副担当の教員、TA の大学院生 4 名）にとって大きな負担であった。また、ホールの設備機器に予期せぬ不具合（スクリーンにスライドが映写されない、音声がでない等）が生じてしまって、授業が始められない、あるいは授業が中断する、ということもあった。しかし授業のオンデマンド化により時間と会場の制約がなくなったことで、これらの問題が一挙に解消されたのである。

1-2 オンデマンド科目「音楽史」の授業概要

本年度 (2022 年度) に筆者がシラバスに記載したオンデマンド科目「音楽史」の、「主題」「到達目標」「授業計画」といった 3 つの項目は、オンデマンド化以前の 2019 年度のときのものとほぼ変わらない。まず主題は、「西洋音楽、日本と世界の諸民族の音楽、ポピュラー音楽等の歴史を、それぞれの音

楽が生まれ発展した時代の文化、社会情勢等と関連づけながらたどっていくことが主題です」と記載している。次に到達目標は2点あり、1つ目は「専攻を問わず、音楽を志す者にとって必要とされる音楽史についての基礎知識、基本的な理解力を身につけます」で、2つ目は「音楽史」が教職課程の教科科目でもあることから「教職課程履修者にとっては、学校教育の教科書にとりあげられている音楽史に関わるさまざまなことから確実に理解できるための教養を身につけます」と記載している。そして授業計画では、前期は「西洋音楽史」、後期は「日本音楽史と世界の諸民族の音楽史」と「ポピュラー音楽史（電子楽器、映画音楽も含む）」の2つのカテゴリーを扱うこととしている。昨年度と本年度の年間30回（半期15回）の授業計画は同一で、以下の通りである。

	前 期	後 期
1	ガイダンス 西洋音楽史概説	ポピュラー音楽史概説
2	西洋音楽史 中世	日本音楽史概説 古代・中世の日本音楽
3	西洋音楽史 ルネサンス	インドの音楽
4	西洋音楽史 バロック	近世日本の音楽
5	西洋音楽史 J.S. バッハ	インドネシアのガムラン
6	西洋音楽史 古典派①ハイドンとモーツァルト	日本のポピュラー音楽①歌謡曲・J-POP
7	西洋音楽史 古典派②ベートーヴェン	ロック
8	西洋音楽史 ロマン派①歌曲とピアノ曲	ビートルズ
9	西洋音楽史 ロマン派②オペラと楽劇	電子楽器
10	西洋音楽史 ロマン派③標題音楽と後期ロマン派	映画音楽
11	西洋音楽史 民族主義①ロシア	日本のポピュラー音楽②アニメソング
12	西洋音楽史 民族主義②北欧、南欧、東欧	ジャズ
13	西洋音楽史 近代①フランス	ミュージカル
14	西洋音楽史 近代②ロシア	タンゴ
15	西洋音楽史 12音技法、現代音楽	日本の作曲家たち～滝廉太郎から武満徹まで

【表1：2021年度及び2022年度の授業計画】

そして2022年度「音楽史」のシラバスの「授業概要」の項目では、以下のようにオンデマンド科目としての特性、オンデマンド科目ならではの受講方法、受講ルールを明確に記載している。

本科目はオンデマンド（非同期型）授業です。よって特定の開講時間、開講教室は設けません。

授業日の午前中に授業コンテンツ（動画と文書資料）を配信します。毎回、授業の内容について理解度の確認を行うため、ミニテストを実施し、配信日翌日までに回答を送ることとします。なお、授業に対する質問や代表教員とのディスカッション等のコミュニケーションは、原則としてオンライン上で行うこととします。（2022年度シラバスより）

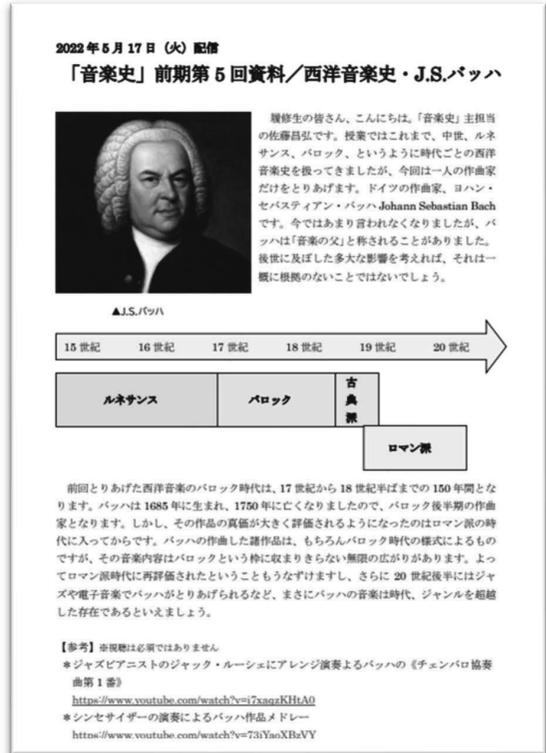
オンデマンド科目「音楽史」の授業コンテンツは毎回、授業日とされている火曜日の午前中に

Google Classroomⁱⁱⁱ (以降 Classroom と記す) により履修生に一斉配信される。一般にオンデマンド授業では、課題の提出によって「出席」が認められるという方法が多くとられているが、「音楽史」の場合、それに相当するのが「ミニテストと授業の感想」である。「音楽史」では履修生が受講の最後に、文書資料データに記載された URL より Google フォーム (以降フォームと記す) にアクセスし、ミニテストの解答と授業の感想を入力した回答を配信日翌日 (水曜日) の 23 時 59 分までに送るルールとなっていて、ミニテストの出来と感想の内容を主担当教員の筆者がチェックして授業の出欠を判断している。毎回のミニテストの出題数は 3 問で、各問とも三択から解答する。もちろん授業資料を読み返しながらか解答することなどは妨げない。そして受講生の参加度を測るための「授業の感想」(字数の指定なし) については、シラバスには詳述しなかったが、授業内容について具体的にふれた感想の記載を求めており、単に「勉強になりました」であるとか「わかりやすかったです」とかといっただけの、授業テーマについて受講者の考えや感じたことが反映されていない感想の場合は出席として認めないことを、Classroom のストリームなどを通じて周知徹底している。そして毎回、特に優れた感想をいくつか選んで、優秀感想文として執筆者本人の了解のもと、次回授業の文書資料データに全文を掲載している。このように「ミニテストと感想」は、数百字の執筆が求められるレポート提出のような課題に比べれば、履修生にとって学習負荷の少ないものである。また、フォームには、必須ではないが授業に対する質問を入力できる項目があり、その回答を次回授業の文書資料データに掲載することで学習のフィードバックをも行っている。なお、担当教員への問い合わせは、本学専用のアドレスによる Gmail で行うよう履修生に伝えている。

2 「音楽史」の授業コンテンツ

毎回 Classroom を通じて配信されるオンデマンド科目「音楽史」の授業コンテンツは、アップロードした文書資料の PDF データ (画像 1) と、授業用 YouTube の動画である。

授業用 YouTube の動画は、文書資料データに記載されている URL よりアクセスして視聴できるようになっている。その授業用 YouTube の動画は、授業テーマに関する解説の「講義動画」と、授業テーマに関する楽曲演奏の「演奏動画」の 2 種よりなる。講義動画は Power Point の録音録画機能等を用いて担当講師が自宅等で制作したものであり (一部に学内の教室での講義を直接撮影したものもある)、演奏動画は前田ホール等、学内で撮影し、それを編集したものである。回ごとにこ



【画像1：2022年度「音楽史」前期第5回文書資料より】

れら複数の講義動画と演奏動画を限定公開で授業用 YouTube にアップし、受講生は先述したように文書資料に記載されたリンクから、再生リスト機能によりそれぞれの動画を自由にプレイバックすることができるのである。

2-1 授業コンテンツの分量

授業の動画を繰り返し見て理解できるところがオンデマンド授業の長所なのであるから、受講者の見たいところ、振り返りたいところになるべくすぐに見つかるよう、動画のコンテンツはできるだけ細かく分け、1本1本の動画があまり長時間にわたらないように制作上、配慮している。

ここで実際例として、2021年度及び2022年度・前期第5回「西洋音楽史・J.S. バッハ」における全8本の動画のプレイ・リストを以下に掲げる。動画1～4が講義動画であり、演奏者紹介の動画を1本挿んで、動画6～8が演奏動画（2021年5月11日に前田ホールにて撮影）である。

動画1 バッハの音楽と生涯① [19' 59"]

動画2 バッハの音楽と生涯② [20' 28"]

動画3 バッハの音楽と生涯③ [29' 16"]

動画4 パイプオルガンとフーガについて [9' 05"]

以上、解説：佐藤昌弘

動画5 演奏者紹介 [2' 43"]

動画6 《トッカータとフーガ ニ短調》BWV565よりトッカータ [2' 58"]

動画7 《小フーガ ト短調》BWV578 [4' 09"]

以上、オルガン演奏：萩野由美子講師

動画8 《平均律クラヴィーア曲集》第1巻 第1番ハ長調 BWV846 [4' 18"]

ピアノ演奏：佐藤昌弘

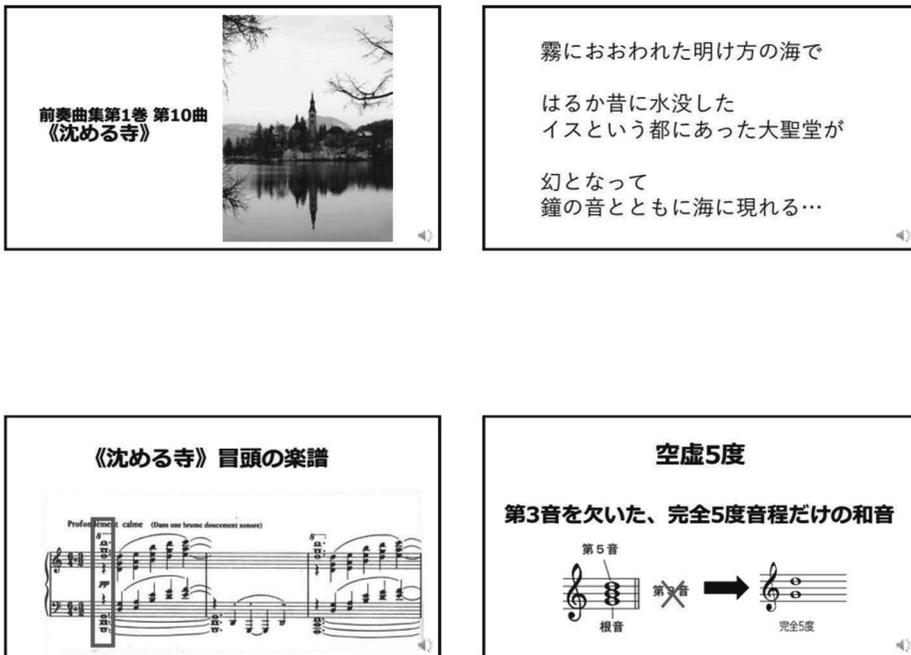
授業コンテンツは、履修生がおおよそ90分で読み、視聴できることを想定した分量を目途に制作しているが、回によっては、その授業テーマの性質上、多めの分量になっているものもある。この「西洋音楽史・J.S. バッハ」の回もその一つで、何し負う西洋音楽史上最大の作曲家ヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750) が授業テーマであるから、とりあげなければならない事項がどうしても嵩み、上記の動画だけで90分を上回っているが、そこは開講の曜日・時限が固定された通常授業と違ってフレキシブルでよいのではないかと考える。ちなみに、授業コンテンツが多くて困るというような履修生からのクレームが来たことはこれまで一度もない。なお、このバッハの回では、文書資料データの最後に3ページにわたり「もっとバッハの音楽を知りたい人・聴いてみたい人のために」と題し、《ゴルトベルク変奏曲》BWV988、《フーガの技法》BWV1080、《マタイ受難曲》BWV244、《ミサ曲口短調》BWV232の各曲について、筆者が勧める名演（名盤）やYouTubeで公開されている動画を詳しく紹介している。「もっとバッハの音楽を知りたい人…」と銘打っているから、これらの文章を読んだり、紹介した演奏を実際に聴いたりことでは必須ではなく、あくまで関

心のある受講生に向けてのコラムのようなものであるが、このように数多く揃ったコンテンツの中からどれだけを学ぶかは、数多いメニューから料理をセレクトすることさながらに、受講者の自由である。したがってオンデマンド科目の場合、一番あってはならないのは授業コンテンツを少量しか提供できないことである。受講生に「物足らなさ」や「詳しく学べない」ということを感じさせるようなオンデマンド科目であってはならないのであって、質・量ともに十分であることを目指すべきであると考え。

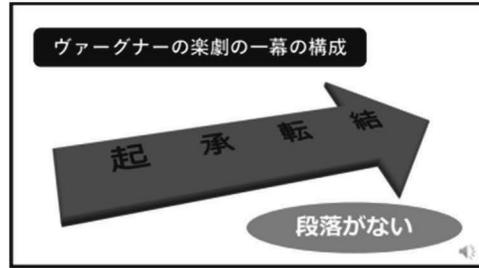
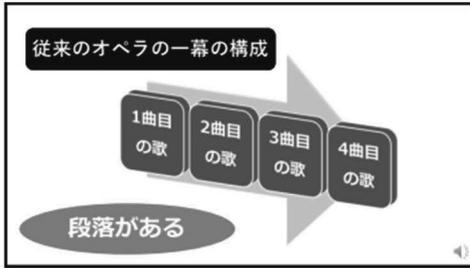
さらに実際例をあげると、2021年度及び2022年度・前期第13回「西洋音楽史・近代①フランス」では、近代フランスの代表的作曲家であるクロード・ドビュッシー Claude Debussy (1862-1918) とモーリス・ラヴェル Maurice Ravel (1875-1937) の2人にスポットをあてて講義動画と演奏動画を制作したため、動画で取り上げきれなかった近代フランスの作曲家たち、すなわちエリック・サティ Erik Satie (1866-1925) やフランス6人組の作曲家たちについては、「その他の近代フランス作曲家」と題し、文書資料データの方で2ページ強にわたり、概略と参考音源のリンクを記載している。学ぶべき事項に漏れがないよう、このような補遺も随時加えている。

2-2 講義動画

授業コンテンツにおいて中核をなすのが「講義動画」である。先述の通り、講義動画はPower Pointの録音録画機能等を用いて担当講師が制作したものがほとんどである。筆者が担当回の講義動画はすべて、Power Pointを用いて作成したスライドにそって解説のナレーションを吹き込み、紹介した楽曲についてはCDの音源を嵌め込んで制作した。



【画像2：2021年度及び2022年度・前期第13回講義動画のスライドより】



**ヴァーグナーは「劇の進行」を第一に考え
切れ目なく物語が進む方法として
3つの技法を編み出した**

技法(1) ライト・モチーフ(示導動機)
劇中での特定の人物、感情、情景に対し
それぞれを表すテーマを設定

【画像3：2021年度及び2022年度・前期第9回講義動画のスライドより】

【画像2】は、2021年度及び2022年度・前期第13回「西洋音楽史・近代①フランス」の講義動画より、C.ドビュッシーのピアノ曲《沈める寺》（前奏曲集第1巻第10曲）を解説したスライドで、【画像3】は、2021年度及び2022年度・前期第9回「西洋音楽史・ロマン派②オペラと楽劇」の講義動画より、リヒャルト・ヴァーグナー Richard Wagner (1813-1883) の「楽劇」Musikdrama について解説したスライドである。いずれのスライドも文字情報は少ないが、これは次のようなことを意図してのものである。講義動画の制作で筆者が信条としているのは「わかりやすさ」の徹底であり、よってスライドは極力見やすいものを作り、解説は極力聞きやすく話さなければならない。スライドとは畢竟「画面」なのであって「文書」では決してない。ふつう人は画面というものを「見る」という意識で目にするのであって、文書のように「読む」という意識では目にしないものである。例えていえば、テレビは見るものであって読むものではないのと同じことだ。細かい解説はナレーションの方で行えばよいのであって、スライドは画像を中心として、文字情報については解説のポイントとなる短い文章だけを載せるとどめる。これに反しスライド本体で細かく解説しようとする、企業のプレゼンテーション資料さながらに、1枚のスライドの画面全体が文字で埋め尽くされることになり、受講生が側からすればそのような煩雑な画面は「見にくい」と感じられ、わかりにくい講義動画になってしまうのは必至である。したがってスライドで表を掲げるのもあまり好ましいことではない。2021年度及び2022年度・前期第10回「西洋音楽史・ロマン派③標題音楽と後期ロマン派」では、リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864-1949) の交響詩全7曲について、つつい前述の信条に反し、それぞれの曲名、作曲年、題材を記した表を講義動画のスライドに掲げ、時間の関係もあって各曲についての細かな解説は割

愛してしまった。ところが2022年度ではこの回の配信後の授業感想で「ドン・キホーテの原作が交響詩ということを知った」というものが予想外に多く届き愕然とさせられた。スライドの表ではちゃんと《交響詩「ドン・キホーテ」》の題材は「スペインの小説家セルバンテスの小説」と明記していたのだが、幾人かの受講生に見落とされていたのである。このことから、スライドに多めの情報を記載するのはいかに伝わりにくいかということも歴然である。それとともに、「ドン・キホーテ」の原作はミゲル・デ・セルバンテス Miguel de Cervantes (1547-1616) の小説であることは常識、と一方的にこちらが思っていたことが、受講生の幾人かにとっては通用しなかったことが露呈したこととなり、授業制作では講師と受講生の知識の格差ということを常に念頭におかなければならないことをあらためて知らされた。

なお、講義動画のスライドについては、すべてを一覧にしてデータ化し受講生に提供している。これは受講生が講義動画を観ながらいちいちノートやメモをとらなくても済み、画面に集中して視聴できるようにとの配慮からである。また、著作権の関係上、講義動画で観せられない映像に関しては、一般YouTubeのURLを文書資料データに記載し、楽曲解説を付記していることで対応している。

2-3 演奏動画

講義動画で説明した音楽を、本学教員をはじめとした演奏家に前田ホール等で実演してもらい、それを撮影し、編集したものが「演奏動画」である。回によっては、演奏者が解説を交えながら実演したものもある。以下2つの表で、授業の各回において、講義動画で講義を行った講師と、演奏動画に出演した演奏者の一覧を掲げる（講師、演奏者とも人選は基本的に授業主担当の筆者）。

	西洋音楽史のテーマ	講師	演奏者
1	概説	越懸澤麻衣 佐藤昌弘	佐藤昌弘 (Pf・解説)
2	中世	佐藤昌弘	佐藤昌弘 (Pf・解説)
3	ルネサンス	越懸澤麻衣	木島千夏 鈴木美登里 望月裕央 森川郁子 (Vo.)
4	バロック	越懸澤麻衣	上菌未佳 (Cemb・解説)
5	J.S. バッハ	佐藤昌弘	荻野由美子 (Org.) 佐藤昌弘 (Pf.)
6	古典派①ハイドンとモーツァルト	西釋英里香	相田麻純 (M.Sop) 馬場由香 (Sop.) 西川麻里子 (Pf.)
7	古典派②ベートーヴェン	越懸澤麻衣	清水将仁 (Pf.)
8	ロマン派①歌曲とピアノ曲	橘晋太郎	白澤暁子 (Pf) 宇野徹哉 (Bar.) 紙谷弘子 (M.Sop.)
9	ロマン派②オペラと楽劇	佐藤昌弘	柳澤涼子 (Sop.) 中鉢聡 (Ten.) 谷川明 (Pf.)
10	ロマン派③標題音楽と後期ロマン派	佐藤昌弘	紙谷弘子 (M.Sop.) 小助川眞美 (Pf.)
11	民族主義①ロシア	越懸澤麻衣	石澤優香 (Pf.)
12	民族主義②北欧、南欧、東欧	越懸澤麻衣	藤井隆史 白水芳枝 (Pf.)
13	近代①フランス	佐藤昌弘	星野苗緒 佐藤昌弘 (Pf.)
14	近代②ロシア	佐藤昌弘	日置寿美子 松岡 淳 佐藤昌弘 (Pf.)
15	12音技法、現代音楽	松平敬	松平敬 (Bar.) 橋本晋哉 (Pf.)

【表2：2021年度及び2022年度の前期授業の講師と演奏者一覧】

	授業のテーマ	講師	演奏者
1	ポピュラー音楽概説	佐藤昌弘	佐藤昌弘 (Pf.・解説)
2	日本音楽史概説 古代・中世の日本音楽	越懸澤麻衣 鶴澤光	鶴澤光 (解説のみ)
3	インドの音楽	小日向英俊	小日向英俊 (Sitar・解説) 逆瀬川健治 (Tabla)
4	近世の日本音楽	森重行敏	野澤佐保子 (箏、三味線) 山口賢治 (尺八) 吉原佐知子 (箏) 森重行敏 (胡弓)
5	日本のポピュラー音楽 ①歌謡曲・J-POP	丸山圭子	丸山圭子 (Vo. Pf.)
6	インドネシアのガムラン音楽	森重行敏	森重行敏 打楽器コース生有志
7	ロック	前野知常	演奏動画なし
8	ビートルズ	佐藤昌弘	鈴木大介 (Gt.) 佐藤昌弘 (Pf.・解説)
9	電子楽器	前田康徳	演奏動画なし
10	映画音楽	栗山和樹	演奏動画なし
11	日本のポピュラー音楽 ②アニメソング	堀江美都子	演奏動画なし
12	ジャズ	佐藤昌弘	原朋直 (Tp.) Dennis Frehse (Dr.) 朝田拓馬 (Gt.) 池尻洋史 (Bs) 佐藤昌弘 (Pf.・解説)
13	ミュージカル	佐藤昌弘	篠原真 (Pf.) ミュージカルコース選抜生 他
14	タンゴ	平田耕治	平田耕治 (Bandoneon・解説) 永易理恵 (Pf.) 那須亜紀子 (Vn.)
15	日本の作曲家たち ～滝廉太郎から武満徹まで～	佐藤昌弘	馬場由香 (Sop.) 西川麻里子 (Pf.) 佐藤昌弘 (Pf.)

【表3：2020年度及び2021年度の後期授業の講師と演奏者一覧】

演奏動画は、2020年度の後期始めから2021年度前期終わりまでの約1年間かけて撮影、編集したものである。さて、ここで本科目のオンデマンド化にいたるまでの経緯をあらためて記しておく。先述のように本科目は2019年度まで、前田ホールにて対面の授業を行ってきた。本科目の2019年度最終授業が2020年1月7日であるから、この時点で新型コロナウイルスの影響はまったくない（国内で感染者が初めて確認されたのは2020年1月16日のことである）。しかし同年2月以降、国内での感染拡大が顕著になっていき、4月7日に政府は、東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県を対象に、特別措置法に基づく緊急事態宣言を出した。このような状況下で同月、本学においては2020年度の入学式が中止となり前期授業開始が延期となった。5月11日によりやく2020年度前期授業が開始となったが、すべての授業をオンラインで実施するよう大学より要請があった。本科目はオンデマンド方式を選択したが、当初の授業コンテンツは、講義を文章化し参考音源のURLを記載しただけの資料のみで、履修生はその資料を読んだあとにフォームでミニテストの回答を送ることにより出席が認められるというだけの実に単純な受講システムであった。そして8月17日に前期が終了し、まもなく大学より2020年度後期以降の「音楽史」の授業方針について指示があった。それは、コロナウイルス感染が今後収束する収束しないに関わらず、次年度以降もオンデマンド科目として開講していく、というものであった。については授業コンテンツの充実を図るべく、講義を動画化し、演奏動画を撮影、編集するようあわせて指示があった。かくして、講義動画と演奏動画を主体としたオンデマンド科目「音楽史」

の今日の授業スタイルは、2020年度の後期より始まったのである。授業コンテンツに動画が導入されたことで、「動画で詳しい解説が毎回あって分かりやすかったです」「授業で使われているスライドをPDF化してあるので、動画を見た後にすぐに資料を見たいときにわかりやすい」「毎回、各コースの先生方をお招きして演奏して下さったのが素晴らしく、深い学びに繋がりました」「様々な音楽のジャンルがあり、それを簡潔にそして分かりやすく動画でまとめてくださっていてとても良かったです」(以上、2021年授業改善アンケートより)といったように、受講生からは非常に好評であった。

それぞれの演奏動画の演奏曲は、筆者の選曲によるもの、演奏家と筆者が話し合っただけのもの、演奏家に一任したもののいずれかである。そのうち特筆すべき選曲は、2021年度及び2022年度・前期第15回「西洋音楽史・12音技法、現代」におけるジョン・ケージ Jhon Cage (1912-1992) 作曲の《4分33秒》である。チャンス・オペレーション (偶然性の音楽) の代表曲として知られる1952年に作曲されたこの作品は3つの楽章より成るが、周知の通り何れの楽章も演奏者は一音たりとも音を出さない^{iv}。演奏動画では実際に楽章に分けて撮影し、出演の松平敬と橋本晋哉の二人には楽章ごとに異なるポーズをしてもらって、計3本の無音の演奏動画を撮影、編集したのであった。この作品はコロナ禍以前に、400名以上いる受講生を前にして松平と橋本が2019年度の授業にてホールで実演したが、そのときは全曲でなく1分の無音演奏に留まった。おそらくこれ以上の時間、無音演奏を続ければ、受講生は無目的に音を立てずにじっとしていることに耐えかねてざわめき出し、会場内は混乱を来すことであろう。しかし動画であれば、受講生はこの作品を何の支障もなくフルサイズで鑑賞することができるのである。

また、演奏動画はどれも演奏風景を間近で撮影したものであることから、演奏者の息遣いが感じられるほどのライブ感のあるものになっている。例えば、2021年度および2022年度・前期第12回「西洋音楽史・民族主義②北欧、南欧、東欧」での、エドヴァルド・グリーグ Edvard Grieg (1843-1907) やアントニン・ドヴォルザーク Antonín Dvořák (1841-1904) の楽曲を藤井隆史と白水芳江がピアノ連弾で演奏した動画については、一履修生から次のような感想が届いた。「プロの方が弾く連弾を初めて聴きましたが、こんなにもピッタリと弾くのはかなり難しいのではないかと思います。ペダルを藤井先生が踏んでいましたが、時々、白水先生だけしか弾かないところでもペダルを踏んでいて、それもバッチリなタイミングだったので、息がピッタリあってすごいなって感じました」(2022年度前期第12回の感想より)。この感想から伺えるように、コンサートホールでの演奏や以前の対面授業の演奏ではなかなか見えないところを目のあたりにできるということは、オンデマンド科目の動画コンテンツの強みであろう。

2-4 キーワードに関する出題

このように演奏動画は、演奏家たちが本科目のためだけに実演した、いわばオーダーメイドの演奏動画なのであって、受講生には是非ともしっかりと視聴してもらいたいコンテンツなのだが、2021年度前期のほぼ半ばに、演奏動画の視聴回数をチェックしたところ、履修者数のおよそ半分の数にしか及んでいないことが判明した。オンデマンド授業は、受講生の受講の様子をいちいちチェックしてその学習活動を管理することができないため、このようなケースは十分に起こり得ることであった。演奏動画を視聴していない受講者が多数いるというこの由々しき問題について、何らかの策を講じる必要に迫られ

たところ、1人のTAが次のような提案をしてくれた。それは、その回の授業に関するキーワードを選んでそれを1語ずつ順不同にばらし、各演奏動画に、視聴者に予測できないタイミングで、ばらした1語1語をテロップで流し、最終的に受講者にキーワードを当ててもらって、ミニテストの一題として回答をフォームで送ることを必須とする、というものである。例えば5本の演奏動画があったとして、キーワードを「オルガヌム」^vというカタカナ5字の用語にしたとすると、「①ヌ ②オ ③ガ ④ム ⑤ル」というように用語を順不同に解体し、演奏動画の①～⑤において各語をテロップで流すわけである。テロップの流れる時間は動画編集担当TAの任意によるものであり、視聴する受講生には知らされていないわけであるから、受講生はすべての演奏動画を集中して観ざるを得ないこととなる。そして、これを実践したところ、たちまち策が功を奏して、演奏動画の視聴回数が如実に増えたのであった。このキーワードに関する出題の設定について2021年度の授業改善アンケートでは、「キーワードを設定したおかげでかなり楽しく授業を受けることが出来て良かったです」という感想がある一方、改善ほしい点に「キーワード制度」「キーワード問題が少し大変だった」といった指摘も見られた。

3 出欠の登録と授業のフォローアップ

かくして、2021年度前半ば以降からは、キーワード問題が加わったことにより、受講生が各回の授業の締め括りとしてフォームで回答するミニテストは4題になった。先にも述べたが、授業配信日(火曜日)の翌日である水曜日の23時59分までに、受講生は受講を済ませミニテストの答えと授業の感想をフォームに入力して送信しなければならない。質問がある者はあわせてこのフォームで質問も入力する。フォームの回答を送ると、受講者のもとには送信された確認メールが送られてくる。受講者の送ったフォームの回答は副担当の越懸澤講師のもとに着信し、回答結果のデータに収集される。この回答結果データは木曜日に、越懸澤講師から主担当の筆者のもとへ送られ、筆者は全員のミニテスト回答、感想、質問をチェックする。その結果、きちんと受講した形跡が認められないような回答の者は欠席に類別してTAへメールで伝える。それを受けてTAはその回の出席登録データを作成して越懸澤講師にそれを送り、どんなに遅くとも金曜日までには越懸澤講師が出欠のポータル登録を終了する。以上の流れが出欠登録までのルーティンである。しかしながら、不測の通信上のトラブルはオンラインではつきものであって、フォームの回答を送ったにも関わらず、ポータルでは欠席に登録されてしまっていたので確認してほしい、というような受講生からの問い合わせは珍しくない。それ以外にも、本科目は履修者数が非常に多いだけに様々な問い合わせや要望のメールがちょくちょく筆者のもとに届く。受講生はオンデマンド授業であっても、対面と同様のきめ細かくかつ迅速な対応を求めているのであるから、これらには即行で返答することになっている。なお、こちらから学生へ送るメール連絡の時間帯については、ハラスメントに抵触する恐れがあるために深夜や早朝は避けるが、かたや学生からのメール連絡は深夜であろうと早朝であろうと構わずに届くのである。このようなことから、決められた時限に開講していないオンデマンド科目は、いわば24時間がオフィスアワーのようなものなのだと認識せざるを得ない。

4 オンライン試験

続いて、本科目がオンデマンド化し、2020年度と2021年度にはどのように成績評価を行ったかについて記述する。成績評価の方法及び基準についてシラバスには、「授業への参加態度を評価の50%、学年末のレポート提出と筆記試験を評価の50%を基準として、成績評価をします」と記載した。まず「授業への参加態度」とはいまでもなく平常点のことであり、具体的には出席状況と課題（ミニテストと授業感想）の出来を指す。次に「レポート提出」であるが、その課題は「日本音楽史と世界の諸民族の音楽史」と「ポピュラー音楽史」という2つのカテゴリーを扱った後期授業について、「特に印象に残った回を1つとりあげ、その授業を通じて学んだこと、発見したことについて800字以上書きなさい」というもので、受講生には入力した原稿をPDFにしてもらい、ポータル「課題提出」にて、定められた期間内にてデータを提出させた。ちなみにオンデマント初年度の2020年度では、レポートの課題や提出の期限・方法について周知徹底すべく、筆者による詳しい説明を撮影し、動画にして配信まで行った。

そしてシラバスに記載された「筆記試験」であるが、これは正しくは「オンライン試験」である。オンデマンド化する以前の本科目は、実際に学年末に筆記試験を行っていて、受講生を10ほどの教室に分散させ、各教室に監督の教職員を1名ずつ配して一斉に実施していた。しかしこのコロナ禍でそのようなことは最早行える筈もなく、オンライン試験にせざるを得ない。そして、オンライン試験で何と言っても大きな問題となるのは「試験の監督」である。受験者が少数であれば、例えばClassroomのMeetを用いて、受験者には全員カメラ・オンにもらった上で、リアルタイムで一斉に試験を行うことができよう。しかし本科目の場合、受験者は400、500といった数になるわけであるから到底それは適わない。試験監督者を置かずに試験した場合、カンニングを抑止できないというのであれば、そこは発想を逆転させて、試験監督をすることをまったく念頭から外し、受験者が何を参考にしようと検索しようと構わず、しかも正解が出るまでリトライできるオンライン試験で実施しよう、ということに越懸澤講師と筆者が考え合って決めたのであった。このオンライン試験は、試験範囲を前期授業で扱った西洋音楽史とし、解答にあたっては授業の資料等を見ても構わないとあらかじめはっきり断った上で、次のような流れでフォームにて実施した。試験日の朝、受験者全員のもとにClassroomよりフォームのURLが配信され、指定された夕方まで各自受験を完了するよう指示が出される。受験者がフォームの回答後に「送信」をクリックすると、自動的に回答のコピーがメールで送られてくる。その届いたメールの「スコアを表示」をクリックすると、たちまち回答に対し正解が緑で✓、不正解が赤で×と表示され、合計点も示される。100点満点中80点以上を合格とし、80点に満たなかった場合、届いたメールの「回答を編集」をクリックし、不正解になってしまった回答を修正し、80点以上を取れるまでリトライできるという仕組みである。

このような試験を実施すると、受験者を評点によって順位付けできないため、S・A・B・C・Dといったランクによる評価が難しい。そこで、授業への参加態度（平常点）、レポート提出に問題がなく、試験も80点以上クリアできた受講生は合格として、全員一律に「認定」を示す「N評価」^{vi}とした。なお、単位未修得については、試験、レポートが合格点に達していない場合は「不合格」を示すD評価、試験未受験、またはレポート未提出の場合はE評価、出席回数が通年で3分の2を満たして

いない場合はF評価となる。そして採点の集計と成績の登録であるが、ポータルに登録された出席データをCSV化し、それを基にエクセルで成績データ（出欠、レポート提出、オンライン試験の採点が入力されている）を作成し、そこから履修者の成績評価を確定して、最終的にポータルに採点登録するというものである。

上記の成績登録に関する作業、先述の出欠登録に関する作業は、主担当の筆者、副担当の越懸澤講師、2~4名のTA（年度によって諸事情により人数は異なる）によるチームで行っているわけだが、これらを含め授業の制作と運営が滞りなくこれまで進められてきた、そして現在も進められているのは偏にチームワークによるところが極めて大きい。

結びにかえて

前にも述べたが本科目は毎回、授業の感想をフォームにて入力することを必須としている。受講者が極めて多いため、それらを一読するのは正直、骨の折れる作業ではあるものの、これによって学生の理解や見解、授業についての要望等を詳しく伺い知ることができ、受講者との貴重なコミュニケーションの機会となっているのである。一步進んでこれをリアルタイムで行えば、さらに受講者のさまざまな声を聞くことが可能となろう。文部科学省の「メディア授業告示」においては、オンデマンドのようなメディア授業が面接授業に相当する教育効果を有するための条件の一つに、「当該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保」ということが挙げられている。この「意見の交換の機会」を設けるべく、希望者を対象としたスクーリングを対面とオンラインの併用で2022年7月下旬に行った。参加者は履修者数の1割にも満たなかったが、本科目がオンデマンド化して初めての、リアルタイムによる担当教員と受講生のコミュニケーションの機会が実現した。スクーリングでは前半に、越懸澤講師と筆者による「シューベルトの《未完成交響曲》はなぜ未完成なのか？」という題目の特別講義を行い、後半は参加履修者と担当教員間での質疑応答ならびに自由なディスカッションを行った。そこでオンデマンド授業「音楽史」の学び方についていろいろと本音で議論ができたことは、今後の授業の制作と運営に資するところ大であった。とりわけ貴重であった意見は、授業コンテンツに「ワークシートがあればいい」というものである。その理由としては、「音楽史」は毎回情報量が膨大なので、どこをポイントとして把握し、何を覚えるべきか、講義動画を単に視聴しただけではそれらがなかなか明確に見えてこない。そこでポイントとなる事項が簡潔にまとめられてあって、重要な用語や人名が書き込めるワークシートがもしあればとても助かる、というものであった。こちらとしては、講義動画を観ながら受講生がいちいちノートやメモをとらなくても済むよう、スライドのすべてを一覧にしてデータ化し提供しているため、それで事足りると考えていたのだが、それは盲点であったのだ。このように「講義の内容を自ら書き込みながら受講したい」という受講生がいるということが知れ、各回の授業のポイントの明示がしっかりとされていないことが浮き彫りになったことだけでも、スクーリングを行った価値は十分にあったといえよう。

形態が対面であろうとオンラインであろうと、学生にとっても教員にとっても、授業というものは双方のコミュニケーションによってはじめて成立するものである。双方の生き生きとしたコミュニケーションによって、学ぶことと教えることが有機的に結びつき相互に作用しあうことで、学び方はさらに

発展していくものであると確信している。それが本科目の授業デザインを通して得た一つの指針である。

注

- i 文部科学省の大学設置基準第 25 条に「授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併用により行うものとする」とあり、その 2 には「大学は、文部科学大臣が別に定めるところにより、前項の授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室等以外の場所で履修させることができる」とある。また同省の 2001 (平成 13) 年の「メディア授業告示」では、メディア授業を「文字、音声、静止画、動画等の多様な情報を一体的に扱うもの」と示し、これが面接授業に相当する教育効果を有するためには毎回の授業において、「教員若しくは指導補助者が当該授業の終了後すみやかにインターネットその他の適切な方法を利用することにより、設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を併せ行うものであって、かつ、当該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保されているもの」とある。さらに同省は 2021 (令和 3) 年の通知で「大学設置基準第 25 条第 2 項等で規定する遠隔授業により実施する授業科目において修得する単位数は、同令第 32 条第 5 項等の規定により 60 単位を超えないものとして上限が設定されている」が、「面接授業の授業科目の一部として、いわゆる同時性又は即応性を持つ双方向性 (対話性) を有し、面接授業に相当する教育効果を有すると認められる遠隔授業を実施する授業時数が半数を超えない範囲で行われる授業科目については、面接授業の授業科目として取り扱い、上記上限の算定に含める必要はない」としている。また、「感染症や災害の発生等の非常時においては、当該感染症や災害等の状況に応じて、本来面接授業の実施を予定していた授業科目に係る授業の全部又は一部を面接授業により実施することが困難な場合において、面接授業の特例的な措置として遠隔授業を行うなどの弾力的な運用が認められる」とある。
- ii 2022 年度の履修者数は前期終了の時点で 570 名である。
- iii Google Classroom は「ラーニング・マネジメント・システム」(略して LMS) と呼ばれるところの学習管理システムの一つ。米国 IT 企業大手の Google が提供している教育向けの ICT ツールで、履修生はパスワードとなる「クラスコード」を入力して登録することによってアクセスが可能となり、クラウドサービスによってさまざまな機能を活用することができる。
- iv 初演はピアニストのデヴィッド・チュードア (チューダー) David Tudor (1926-1996) が行ったが、奏者に楽器の制約はない。全曲の演奏時間を 4 分 33 秒として各楽章の時間は任意である。
- v 単旋律のグレゴリオ聖歌に新たな声部の旋律を追加して歌わせる技法のこと。中世期の 9 世紀から 13 世紀にかけて発展。中世の西洋音楽史の解説では必ず扱われる重要な用語である。
- vi 本学では 2022 年度よりこれは P 評価 (pass) に変更された。

引用・参考文献, インターネット

堀和世, 2021, 『オンライン授業で大学が変わる～コロナ禍で生まれた教育インフレーション～』, 東京: 大空出版.
キャストリア株式会社, 2020, 「デジタルラーニング研究室」, 2022 年 5 月 2 日にアクセス.

<https://lab.castalia.co.jp/2020/12/blog-post.html>

文部科学省, 2021, 「大学等における遠隔授業の取扱いについて (周知)」, 2022 年 5 月 5 日にアクセス.

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/mext_00027.html

文部科学省, 2018, 「大学における多様なメディアを高度に利用した授業について」, 2022 年 6 月 26 日にアクセス.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryo/_1icsFiles/afieldfile/2018/09/10/1409011_6.pdf

朝日新聞, 2021, 「新型コロナウイルス感染 日本 1 年」, 2022 年 7 月 31 日にアクセス.

<https://www.asahi.com/special/corona/japan-yearly/>